ああ石狩の天空晴れて孤影ぞしばし春の水南 岸辺に の縁 に憩ふ水鳥の 陵かの 一次とすが 水が面が Š

先人の絢夢偲びつつ

いざや伝

「統の聖火を翳が

児等が生命や聖からん け謳ふ恵迪の Ť

散りゆく夜迷雲のかげ消えて 春風頬涙を乾すなれば 寮祭の庭に四十回のまつりにおしまでたび 声を限りの感激かない。

几

歓喜憂苦を共にせむ

義憤が胸にほ 散りぬる若桜もあるぞかし 燥点 南紫 いかで我等の蹶起ざらん 映えにしか朝日影 のぼのと

青雲の峯巍峨の峯集ひし雁の行く手稲っと

人生意気に感じてか 松の枝漏るる月影やまつ。 えも つきかげ 結ぶ契の盃に to the state of the s

Ŧi.

誓ひし眸に光輝あれ

なみ 熱血燃ゆる益良夫がない ますら お 剛毅の大旆仰ぎてし 皇国の道に挺身まんと の原始林は愁へども